スマホ標的 ウイルス急増

1～11月 11万種超、昨年の2.8倍

スマートフォン（高機能携帯電話）やタブレット端末を狙ったコンピューターウイルスが今年1～11月、日本も含め世界で新たに11万種超発見されたことが、情報セキュリティー会社カスペルスキーの調査で分かった。昨年1年間は約4万種で、すでに2・8倍に達している。

同社で中央ヨーロッパ地域の上級ウイルスアナリストを務めるクリスチャン・フンク氏によると、スマホなどの携帯端末を標的にしたウイルスは2011（平成23）年から急速に増え始めた。

同社は同年8～12月に6293種を確認。翌年は4万107種を発見した。

今年はさらに増え、11月までに11万3315種に上った。10月は約2万種、11月は約2万5000種で、この2カ月で急増した。

フンク氏は「携帯端末の世界を有望な収益源と考える犯人が増えている」と指摘。「来年はウイルスがさらに増え、機能もより洗練される」と予想する。

これまで見つかったウイルスは①個人情報の窃取②金銭目的③いたずら④遠隔操作―に機能が大別される。金銭目的の場合、通信料と別に課金されるメールを勝手に送信したり、端末を使えなくして「金を払えば元に戻す」と脅したりする手口がある。

ウイルスはアプリ（ソフト）に仕込まれ、ダウンロードで感染する。パソコンのように、ウェブサイトを閲覧しただけで感染するタイプは今のところ確認されていない。